

第六章 在外派遣の恩返し

○ 中学校 10年目

帰国後は、所属校にそのまま残留であった。3年間のブランクがあると、生徒は全員入れ替わっていた。教職員も半数以上が新しいメンバーだったが、派遣前に一緒だった先生もある程度残っておられた。初めてあった生徒に「先生がああの伝説の松井先生ですか？」と真顔で聞かれた。自分が海外に行った後にどんな伝説が語られたのか興味があったが、その生徒の反応からして好意的な印象のようだった。話を聞いてみると、「先生、私はあなたの涙に何度ももらい泣きました。(第四章)」と色紙に記してくれた生徒の妹だった。幸いにも、かなりのアドバンテージをもらっているかたちのスタートとなった。

一歩後退・・・と思えるような境遇も度々やってきた。所属校に残留したものの、教科担当が社会科ではなく数学科に変わった。社会科教員は足りているのに、教科を変更してでも残したいと考えてもらえたということだろう。私自身は、台湾でいい思いをさせていただいたので、恩返しのつもりでそのような境遇を受け入れた。

もちろん、「社会科体操」や「いろは de 歴史」などの自作教材は使えなかったが、それでもチャレンジ精神は続いていた。「数学あのねのね」という新しい学習方法を作りだした。「一次関数あのねのね」は、次のような感じになる。「 $y=ax+b$ 初めに切片 b をとり、右に1行って a あがる。これを3回くりかえす。」この通りにやると一時関数のグラフを描くことができた。数学が苦手な生徒には、一定の効果があつたと思っている。

当時、私が数学を教えた中学生の中で、市川市の教員になった生徒がいる。「先生、数学あのねのね、教えてもらいました！」と言ってくれた。当時の自分をほめてあげたい。

帰国して戻った O 中学校は、ちょうど20周年にあたっていた。記念行事を行い、周年行事の担当者として奮闘した。思い返せば、高雄日本人学校で30周年記念を経験し、記念誌担当をしたが、その後異動する度に「周年行事」だった。O中学校20周年、F中学校25周年、I小学校140周年、S学園開校、O小学校40周年。全ての記念行事でほぼ主担当として行事を企画運営していた。そのために異動しているのではないかと思うほどだ。最後は、S学園に戻ったが、ここでは周年記念行事ではなく「新校舎落成記念式典」を行った。これを主導したのも私自身だった。記念行事をすると、それだけ業務を増やすことになり、諸手をあげて賛成という空気感ではなかった。「子どもたちにとって記念になり、つながりを築ける」という理由などを挙げて実行する側・推進役をかって出てきたが、今振り返っても、「やってきてよかった」と思っている。子どもたちの手元に「記念誌」や「記念写真・航空写真」などが残れば、未来の自分が何かを気づき感謝する機会が生まれると考えるからだ。自分があまり関わっていなかったとしたら、なおさらだ。人は、思い出の品々を見て、いつかそのことに気づく。既に不用品として捨ててしまっていたなら、その気づきはさらに大きい。自分が大切にしておかなかったものの中に、大切なものを見つけることになる。人生とは、おそらくその繰り返しなのかもしれない。

桜の木のように

F 中学校時代は、新しい自分との出会いでもあった。

移動したものの、担当教科は「数学科」のままだった。まさか・・・当の本人も当惑するような異動であった。行った先は、いわゆる教育困難校の部類に入る状況があった。なぜ数学科のままの異動になったのか・・・は、1年前に所属校に残った状況と同じだった。いずれも必要な人材として考えていただいたということである。桜の木が咲く範囲は、その根が伸びたところまで・・・。冬の時期（苦勞する時期）は、根を伸ばそうと考えていた。

海外の学校を経験し、学校としても4校目になるが、まだ「学年主任」のポストではなかった。「副主任」でもなく、一担任だった。副担任だった2校目の O 中学校から比べたら、評価をしていただけていることは感じていた。高雄日本人学校の3年目は教務主任、戻った O 中学校は生徒指導主任だったので、担任をするのは2年ぶりだった。校務分掌は自分がずっと取り組んでいた「生徒会活動」を任された。

生徒指導は、大変厳しい状況だった。サッカー部顧問をやりながら、部員への影響力を足掛かりに、立て直しを図った。新参者の私の言葉は、中学2年生で既にこの学校を1年間経験している生徒には、なかなか言葉が入っていかなかった。当然、中3のヤンチャなメンバーには全くと言ってよいほど入らなかった。そのことで、度々ぶつかることもあった。それでも愚直にやり続けたことで少しずつ、少しずつ改善されていった。2学期になり、新しい生徒会本部役員をほとんどを自分のクラスから輩出することになった。役員になった生徒たちを動かして創立25周年を記念した取組を進めていった。状況は一気に好転していった。

翌年は3年生に持ち上げり、学校運営の面でも影響力が増した。大きな手ごたえを感じつつ、卒業生を送り出した。学年を支えた主任層のメンバーがこぞって異動することになり、翌年度、初めて学年主任をすることとなった。

F 中学校の4年間は、サッカー部の顧問としても頑張った。

男子は、サッカー部に入っている生徒が多く、中1～中3を合わせると総勢50人規模の大所帯だった。赴任したての新参者にとっては言葉を届けるのに苦勞するが、幸いにもサッカー部顧問という立場が生徒への発言力を増してくれていた。

2年目に入ってきた1年生のチームは、小学校でも頑張っていた選手が多く、粘り強いチームだった。8月末から始まった1年生大会では、強豪チームに競り勝って優勝した。その後もクラブチームには負けることもあったが、中体連の試合、公式戦では最後の3年生の総体準決勝まで勝ち続けた。トロフィーも沢山もらった。それらは毎回カードにして、参加した選手たちに渡していた。左は、4年間の成績をまとめた表である。この右下に「総体優勝トロフィー」を入れ込み、最後の夏に闘志を燃やせるように生徒たちを鼓舞した。しかし、準決勝は地力ある M 中学校に完敗だった。このカード作りが、その後の取組に生かされることとなった。



F 中学校3年目、学年主任で迎えた1学年は、私以外の担任は異動・初任だった。中には、長らく学年主任をされていた先生もいらして、その方のサポートをいただきながら自分なりのカラーを出せるように頑張っていた。

このクラスを活気づけたものは何だったのか。振り返って考えてみると、「社会科体操」だったように思う。違う学校から集まった生徒たちが、声を張り上げて一緒に社会科体操をする光景は、クラスが明るくなるだけでなく、心地よい安心感を提供していた。みんな撮影するよ〜とビデオカメラを向けると、多くの生徒がやってきて「私も映りたい、私もやる。僕もやる・・・。」と大騒ぎになっていた。その中には、普段のテストでは全く点数がとれない生徒も混じっていた。恥ずかしがらずに自分をさらけ出すことができることで、友達とつながり、安心して学べる空間ができあがる。これを体感するような様子だった。

1年1組は、給食のエピソードが懐かしい。その前の卒業生の最後の給食で「みんな、最後の給食だから完食しようよ！」と投げかけて、食缶を完全にカラにして、最後に良い思い出を作ることができたという話を1年1組で話したところ、「自分たちも完食に挑戦したい!」と多くの生徒が張りきった。多少の戸惑いもあったが、連日、完食を続けた。完食するうえで、「ほうれん草の和え物」などの野菜類を食べるのは難しかった。そんな時は、担任の私が大盛にして、おかわりをしてピンチを救っていた。暫くすると、その野菜類が多くなっているような気をしてきた。気になって周りのクラスを確認したところ、間違いなく多かった。そこで、給食室を訪ねてみた。「すみません、1年1組担任の松井です。うちのクラスの野菜の量が多いような気がするのですが・・・」給食の調理員さんは、ニコニコしながら答えてくれた。「1年1組ですね。いつも沢山食べてくれてありがとうございます。給食室でもみんな感謝しています。毎日食缶をカラにしてくれて・・・。野菜は他のクラスでたくさん余ってしまうので、1年1組には少し多めに入れていきます!」ありがたい話ではあるものの、「完食するのは、生徒のこだわりで続けているものの、野菜はいつも担任が大盛にしているくらい。多くするのはご勘弁願いたい・・・と丁寧にお願いした。」そんな笑える事件もあったが、結局完食は1年間やり切った。

給食の時間に女子が普通におかわりできるクラスは、開放的な雰囲気も保たれている。給食は、クラスの状況を判断する一つのバロメーターだった。

卒業生を出した後は、周りの環境が整っていく・・・この感覚は、初任校、二校目の学校と同じだった。この時の1年1組とクラス替えして新しくなった2年1組は、私の受け持った中でも多様性を認め合える素晴らしいクラスだった。しかし、3年に上がることなく、教育委員会に向かうことになる。木の根を伸ばす時間が更に続くことになった。



フォルモサの祈り

在外での記録を本にしたいと、全国海外子女教育国際理解教育研究協議会（全海研）という組織に相談した。派遣教師が国際理解教育選書シリーズを書いていて、自分の実践もその中の1つに入れてもらいたいと思って相談してみた。当時の事務局長さんと面談し、更には創友社（選書シリーズを出版している会社）の社長さんともお会いして、なんとか出版にこぎつけた。定価2,100円の本を500冊買い取ることで受けていただいた。ただし、条件があった。「全海研の幹事会に参加し、幹事として協力すること」だった。とにかく出版して記録に残しておきたいという思いが強く、幹事もお受けすることにした。

本は、学級通信や現地からの便りなど膨大な資料の中から、出版社のスタッフが内容を精選してくれた。自分自身の3年間はそこにつまっていた。編集作業はお任せし、校正作業に協力する形でなんとか出版にこぎつけた。多くの方々の協力で予定していた冊数では不足が出たため、300冊程度の増刷をお願いした。自分自身の大きな自信につながる一歩だった。

全海研事務局長との約束通り、幹事の一人として幹事会に参加して活動することになった。

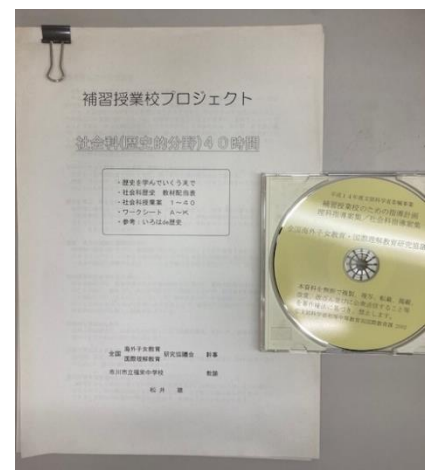
全海研は、30回目の全国記念大会を終えた頃だった。当時の幹事会は、会長が勤務されている足立区立の中学校で毎月第四土曜日に開催されていた。私は、部活動の顧問もしていたので、大会などの日程と重ならない限りは参加し続けた。全海研は、派遣教師を送り出すお手伝いと帰国教師が活躍する場を作るのが主な役割だった。派遣前には、「帰国したら、恩返しをします」と宣言して在外教育施設に派遣されるものの、周りを見渡しても「恩返し」を実行できている人は少数派だった。なんとかこの灯を消さずに、派遣教師をつないでいかなければならない・・・そんな思いで取り組んでいた。全国大会は、おおむね東西交互に実施した。長崎、東京、京都、東京、千葉、鹿児島、東京、大阪、愛知、愛媛・・・参加費も交通費も自腹でのボランティア活動をほぼ10年近く続け、最後は事務局長も担当した。

全国大会運営以外でもいくつかの役割を担った。

一つ目は、派遣内定者研修への協力。1月に文科省が実施する研修の一コマを、全海研としてグループワークを中心にして、「派遣内定者の心構え」の研修を実施した。

二つ目は、補習授業校プロジェクトへの協力。世界の補習授業校で活用できる40時間の略案（社会科 歴史的分野）を作成した。その中には、自分が創作した「いろは de 歴史」も入れ込んでみた。

更にもう一つは、「日本語フォーラム」の企画・運営。国際理解教育の研究会において取り上げられる「日本語教育」の分野に特化させて、先進的な取組をされている方々を紹介していく啓蒙活動としての位置づけだった。日本語指導の経験を持たない私が、この事業の主担当者として抜擢された。今思えば、この経験が千葉大学での現在の授業「学校の国際化」の指導につながっている。



日本小中学校校長、教師訪台団

「フォルモサの祈り」の出版準備をしている頃、台湾に招待されるという出来事があった。届いた文書のコピーは右の通り。8月中旬にお話をいただき、11月の下旬に訪問した。招待を受けたのは、校長3名（東京2・青森）、教諭2名（栃木・千葉）の計5名だった。

この取組は、例年行っているものではなく、この時初めて行われるものだった。翌年以降もあるかどうかわからない・・・という試験的な取組だった。推薦理由は、2つだった。

①日本と台湾の教育関係者の交流を深め、相互理解に役立てる。

②これまでの台湾の教育に貢献した先生方へのお礼の意味を込めて。

5泊6日の行程で、教育部（日本の文科省に相当）、台北県教育局、台北市教育局、台北市公立学校、台北市私立学校等の表敬訪問・視察・見学の旅だった。

この時の様子をまとめたノートが残っている。やはり、最初に「思い」を綴っている。

当時のノートからいくつかの記述を抜粋してみる。

11/26 台北県教育局

幼稚園を増やし、義務教育を支えたい。アイデンティティをしっかりとさせる教育を。国際理解はアイデンティティがしっかりしてこそ。小中一貫を目指しているが、教員の交流はさ

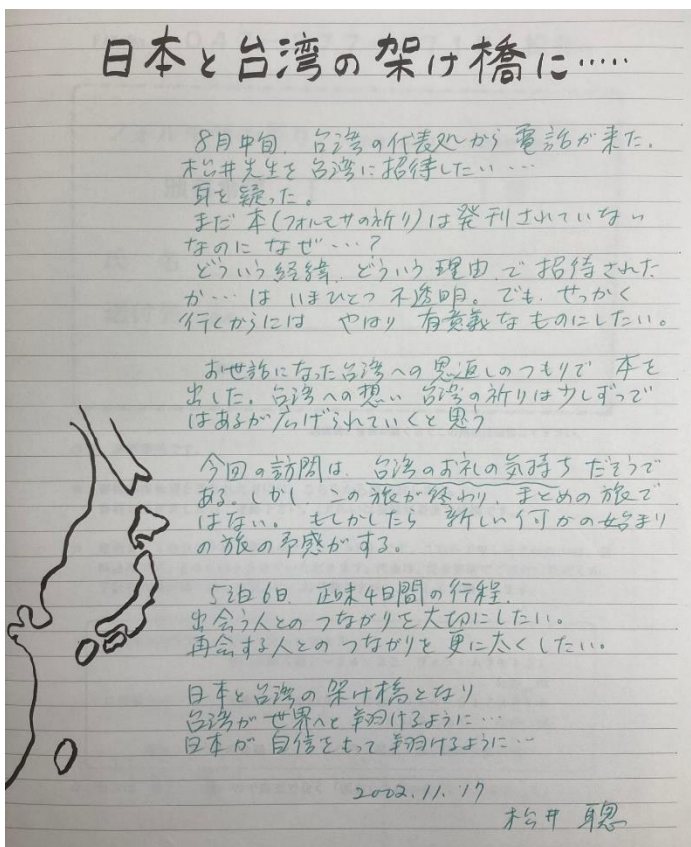
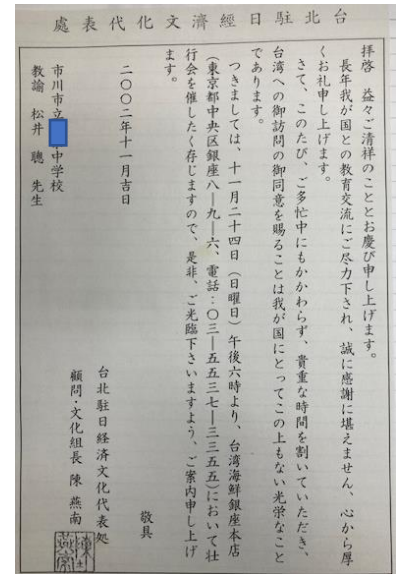
かんではない。連携していくことが必要。

11/27 台北市立中学校

学校は、台北当代芸術館と建物を共有している。夜間は施設を地域に開放し、地域大学が運営されている。インターネットを活用したE-learningを実施。

南投県の見学では、1999年の大地震の後の対応を伺っていた。136校を建て直すこととなり、「慈濟基金会(仏教界)」との連携を深めていると記載してある。

2024年4月に起きた台湾東部沖地震では、あっという間に一次避難所の立ち上げが行われ、避難民の居住空間が確保されていた。また二次避難所への移動もスムーズだった。今振り返れば、台湾の方々は、この頃の教訓をしっかりと生かしているのだと感じる。



花・照・心（はな てらす ころろ） Flowers tell us their mind.

この時期の最も大きな出来事。それは、最愛の父を亡くしたことだ。

（F 中学校の3年目、帰国してから4年目のことである。）

高雄日本人学校の3年目、体調を崩して緊急手術となる父を見舞うために一時帰国をした。そこででの手術は一応成功した。手術中は、祈るような心境だった。数時間かけての手術の後、担当医の先生が手術で摘出した患部を見せてくれた。今でも脳裏に染み付いて離れないその光景。大手術をやり切ってくれた感謝と、その痛みに耐えてきた父への思いが交錯していた。これで助かったのだろうか……。主治医の話からすると、完治には至っておらず、いずれにしても経過観察が必要だとのことだった。まずは一命をとりとめた、これで十分だった。

病床にあっても父は気丈だった。

自分よりも相手を気遣うことが体に染み付いているかのように、いつも穏やかだった。

退院後は、趣味の絵を描くことが日課になっていた。私は市川、姉は船橋に居所を構えていたが、その双方に加え、横浜に住む実姉に対して、絵手紙を描いて送ってくれていた。その絵手紙には、優しさが溢れていた。時折調子を崩すこともあったが、平穏な日々が暫く続いた。

父の療養生活が続くなか、叔母（母親の妹）の容体も芳しくなかった。小さい頃から叔母を慕って、甘えてばかりで、大学生になっても「何かごちそうして……」と銀座にある叔母が務める印刷会社に行ったこともある。私たちにとっては、ほぼ家族のような存在だった。帰国した翌年の暮、その叔母が他界した。姉は、私以上に叔母との距離が近く、悲しみを通り越して絶望のような空気感が流れていた。身近な人との別れ。これまで経験したことのない感情だった。それでも、しっかり恩返しをしなきゃ……という気持ちが働き、叔母の家の処分や財産相続の手続きなど、出来る限りのことをお手伝いした。

病床の父は、どんな思いだったのだろうか。なるべく平穏に、毎日を楽しく過ごせるようにふるまっていた。朝ご飯を食べたばかりなのに、「今日の夕飯は何かなあ……」ということが多くなった。その言葉を聞くたびに、なぜか心が温まっていた。

あまり疲れないように生活しつつも、タイミングを見ながら小旅行にもいっていた。そんな父の望みは、「真珠湾をみること」だった。何とかして叶えてあげたいと思い、夏休み期間に父母と姉、そして私たち夫婦の5人のハワイ旅行を企画した。今思えば奇跡にも近い旅だった。ハワイ在住の従弟が働く蕎麦屋を訪れた後、念願の「真珠湾」に行った。

「私の人生は、ここから……。戦争に翻弄された人生だった。」

父の心の叫びだった。

小さいことから父との問答が大好きで、とにかく疑問に思うことをぶつけていた私。そこから垣間見える父からは、「戦争への思い」は全く伝わってこなかった。過去を振り返るのではなく、常に未来を見る……。そんな姿勢を教わっていた。それゆえ、真珠湾での父の一言は重かった。人生最後の心の叫び。来てよかったと心底感じた瞬間だった。

父にはもう一箇所行きたい場所があった。

「ハワイ島でキラウエア火山を見たい。」

もちろん、父の望みとあれば実現させたいと思い、そちらも実行した。911のテロの記憶が残っているアメリカにおいて、航空機の手荷物・身体チェックは厳しかった。小型飛行機でハワイ島に行き、ドロドロの溶岩が流れる火山を見ることができた。体力的には厳しい旅になったが、父の思いを叶える旅は、大満足の旅となった。

ハワイから戻ると、父の容体が急変した。無理をさせてしまったからだ。

これまでも体調を崩しては回復し、また崩しては回復し・・・を繰り返したので、今回も一時的な体調悪化だととらえていたが、そうはいかなかった。医師の見立ては、残酷にも治る見込みはない・・・というものだった。今後、痛みが相当ひどくなるだろうから、その痛みだけでもとってあげるほうが良いのではないかという診断だった。

家族がその現実を全く受け入れられない状況の中、意外にも父の決断は早かった。

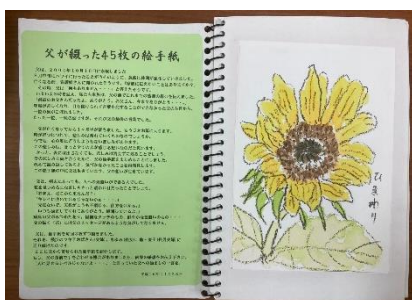
父はホスピスを選んだ。本人が一番受け入れたくないだろう事実、「最期」を悟ったのだった。ホスピスにいる父は、穏やかだった。もう長くないという現実を父を知る親戚一同に伝えた。父が亡くなったのは、本家（新潟県柏崎市）からの一行が父を見舞って直ぐのことだった。最後に皆さんにお別れができてほっとして、安心したからだろう。

ここから先は、「第一章 最後の式辞」につながっていく。

父が他界してどうしようもない悲しみが襲ってきた。何とかして、抜け出したい思いから、父の絵手紙を本にまとめることにした。（父は闘病・療養中に絵手紙を送ってくれていた。）絵はカラーコピーして言葉は打ち直し、日付順に貼った。10冊は作っただろうか。弔いに来られる親戚一同に渡すことにした。そこには、人生を彩る言葉がちりばめられていた。

この絵手紙集のタイトルは、父の名前「照忠（てるただ）」の「照」をとって、「花・照・心（はな・てらす・こころ）～Flowers tell us their mind.～」とした。

この本の冒頭に、私自身の思いを記している。一部を抜粋して紹介する。



父が亡くなってから1ヶ月半が経ちました。もうじきお墓に入ります。時が経つにつれて、悲しみは薄れていくものなのでしょうか。今でも、心の奥にどうしようもない悲しみがありません。この悲しみは、きっと全ての人が感じる想いなのだと思います。きっと、表には出さなくても、悲しみは消えずに残ることでしょう。その悲しみと向き合うために、父の絵手紙をまとめることにしました。改めて読み返してみると、気づかなかったことを再発見します。この絵手紙の中に父は生きています。父の想いが生きています。

父は、病床にあっても、人への気遣いができる人でした。花を見つめるまなざしもきっと暖かい目だったことでしょう。「おまえ、どこから来たんだ?」「キレイに咲いているじゃないかぁ・・・。」「元気ないぞ。天候がこうも不順じゃ、仕方ないかぁ。」「いつも励ましてくれてありがとう。感謝しているよ。」病床の父がみつめた花々。繊細なタッチのもの、鮮やかな色遣いのもの・・・父の描く「花」には父のメッセージがあるような気がしてなりません。

記録をつなぐ

F中学校は、4年間の在籍だった。その間、常に「記録すること・まとめること」を考えて取り組んでいた。下の写真は、4年間のまとめCDを集めたファイルである。CDは3つの分野にわたっていて、行事ごとのまとめはまた別にある。ファイルの中には、「さくら（独唱）」の楽譜も入っていた。この頃は、この歌の歌詞が常に頭の中を流れていた時代である。

生徒会関係

- ・生徒会 2003 (H15)
- ・平成17年度 生徒会活動作品集 ～小学校訪問・予選会～

総合的な学習の時間・特別活動（旅行的行事）

- ・1年総合まとめ
- ・1学年「総合」について
- ・職場体験 平成17年度 第2学年
- ・鎌倉探訪 F中学校 第2学年
- ・信州探訪 予察報告

国際理解教育関係

- ・ドイツ留学生受け入れ事業
- ・第一回開発教育／国際理解教育コンクール 外務大臣賞（教材部門）
- ・ODA 民間モニター H17 エジプト
- ・日本の「ODA」とエジプト
- ・全国海外子女教育国際理解教育研究協議会 第32回東京大会

このまとめファイルの表紙の裏には、いつものように「思い」が記されていた。

F中での出会いに感謝（前段部分省略）

あれから4年……。時の流れはものすごく速かったです。ここでしかないような貴重な経験をたくさんしました。ひかり祭の応援に燃えたこと、修学旅行前にスカートの長さで対決したこと、25周年のさざなみ祭を企画したこと、合唱の歌声に涙したこと、学年集会で熱く語ったこと……。今思うと、全てに対して「ありがとう……」という気持ちです。

さあ、勝負の3年生！という時に皆さんと一緒に歩けないのは辛いことですが、その思いを大切にしながら、新しい職場で心機一転頑張ります。私がしてきた仕事は私しかできないことではありません。後は、よろしくお祈りします。ここに、これまでの仕事をまとめたCDを作成しました。行事ごとでまとめたものは、以前お配りしましたが、今回は私の仕事全般にわたるものです。直接使っていただけるのはほとんどないかもしれませんが、何かの参考にしてください。引継ぎがしっかりすれば、事務的な仕事量が軽減され、その分生徒に寄り添うことができます。それは生徒にとっても幸せなことです。F中の発展を祈っています。F中での出会いに感謝しつつ。

